

主 文

原判決を取り消す。
被控訴人らは連帯して控訴人に対し金五万円およびこれに対する昭和二七年一二月二五日以降完済まで年五分の割合による金員を支払え。
訴訟費用は第一、二審を通じてこれを三分し、その一を控訴人の、その余を被控訴人らの連帯負担とする。

事 実

控訴代理人は主文第一、二項同旨（従前の請求の趣旨を減縮）および「訴訟費用は第一、二審とも被控訴人らの連帯負担とする。」との判決を求め、被控訴人らは控訴棄却の判決を求めた。

当事者双方の事実上の主張並びに証拠関係は、控訴代理人において

一、 原判決二枚目表一行目「相互にうち合つて遊戯中」の次に「控訴人および訴外 A、B の三名はパチンコの弾丸を消費し尽したので、被控訴人らの子供四名が二名宛双方に別れてうち合うこととなり、控訴人および右 A、B の三名が傍観中」を加える。

二、 控訴人としては被控訴人 C、D の子 E のうつた弾丸が控訴人の左眼に命中したのではないかと考えるのであるが、それが確然としないところ、被控訴人らの子供四名中の誰かのうつた弾丸が控訴人の左眼に命中したのであるから、いずれにせよ被控訴人らは民法第七一九条第一項、第七一四条第一項による損害賠償の責に任ずべきである。

三、 なお、従前の損害賠償請求金額を慰籍料金五万円のみ減縮し、被控訴人らに対し右金五万円およびこれに対する被控訴人らに本訴状が送達された日の後である昭和二七年一二月二五日以降完済まで民事法定利率年五分の割合による遅延損害金の支払を求める。

と述べ

証拠として新たに控訴代理人において甲第一四号証の一ないし四、第一五号証の一ないし三、第一六号証の一ないし四、第一七号証の一ないし三、第一八号証を提出し、当審証人 F、G、H、I の各証言並びに当審における控訴人法定代理人 J、控訴人各本人尋問の結果を援用し、被控訴人 C、D、K、L において当審証人 M、E、N の各証言並びに当審における被控訴人 K、C 各本人尋問の結果を援用し、当審提出の前記甲号各証中第一四号証の二、第一六号証の一については公務所作成部分の成立のみを認め、その他の部分の成立は知らない、その余の同号各証の成立はいずれも認めると述べ、被控訴人 O において当審証人 P の証言を援用し、当審提出の前記甲号各証の成立はいずれも知らないと述べ、被控訴人 Q において右甲号各証の成立はいずれも知らないと述べたほかは、すべて原判決の事実摘示と同じであるので、これを引用する。

理 由

一、 控訴人および控訴人主張の被控訴人らの各子供が昭和二六年当時いずれも未成年者（被控訴人 R については真正に成立したものと認めるべき、その余の被控訴人については成立に争いのない甲第五ないし第九号証によれば、控訴人は昭和一七年五月一三日生、被控訴人 C、D の二男 E は昭和一三年一二月二一日生、同 K、L の二男 N は昭和一四年九月一二日生、同 O、S の長男 P は昭和一六年一月三日生、同 Q、R の三男 T は昭和一五年一月二七日生であることが認められる。）で、それぞれ法定代理人である被控訴人ら実父母の保護監督下にあつたものであるところ、同年一二月二〇日に控訴人と被控訴人らの右子供四名が控訴人主張の U 方附近でパチンコ遊びをしていた際、控訴人がその左眼を負傷したことは当事者間に争いが無い。

二、 控訴人は控訴人の右負傷は右パチンコ遊びの遊戯中被控訴人らの前記子供四名の中のいずれかの発射した弾丸が控訴人の左眼に命中したことによるもの、すなわち右子供四名の共同不法行為によるものである旨主張するので、次に判断する。

（１） 成立に争いのない甲第一号証の一、二、被控訴人 C、D、K、L については成立に争いがなく、その余の被控訴人らについては公文書であるから真正に成立したものと認める同第一四号証の三、第一五ないし第一七号証の各一、二、原審証人 V の証言により成立を認める同第二号証に原審証人 W、X の各証言並びに当審における控訴人本人尋問の結果を綜合すれば、前記パチンコ遊びは前示一二月二〇日の夕刻頃控訴人および被控訴人らの前記子供四名のほか同年配の A、B が各自俗にパチンコ（豆鉄砲ともいう）と称する玩具（木の又にゴム紐をつけ、これで木の

